

第18回大会報告記

岡野浩史

第18回日本アイリス・マードック学会は香川県善通寺市の四国学院大学で、2016年10月22日(土)に開催された。

最初に、12時30分から総会が開催された。まず、ハラ会長から挨拶があり、今年で本学会が第18回を迎えることの意義が熱意を込めて語られた。また、開催校の担当者として大会の開催のために尽力してくれた中西氏に感謝のことが送られた。また、事務局に対しても労いの言葉があった。次に副会長である井上澄子氏の喉の不調により、代わりに大槻理事から午前中に開かれた理事会について報告があった。まず、来年度の学会の開催地については、明治学院大学とすること、日程の第1候補は11月18日、第2候補は11月25日とすることが報告された。ただし、日程の最終決定については担当校の事情で時間がかかるかもしれないとの説明があった。次に来年度の企画について説明があり、研究発表については例年どおりだが、特別講演についてはハラ会長から講師として国際アイリス・マードック学会の Anne Rowe 氏を招聘する案が出されたことが報告された。これに対して学会員から、費用はどうするのかという質問があり、費用については、明治学院大学から一部の助成を得ることができる可能性があり、宿泊についても同大学の施設の利用が可能である旨の説明があった。Rowe 氏が無理な場合は他の同学会関係者にあたってみるとの案や在日本のイギリス人俳優によるマードックの詩や文章の朗読の企画案もハラ会長から出されたことも報告があった。また、井上副会長が再任されたこと、理事については現状維持であることが報告された。事務局からの住所変更連絡や企画提案依頼などのあと、会計報告があり、昨年度の特別講演講師であった野中涼氏が

学会の財政に配慮して交通費も講演謝礼も受け取らなかったことが報告され、謝意が表明された後、2015年度の収支決算報告、2016年度の予算案及び収支の中間報告が了承された。

今年の研究発表は中窪靖氏の「*The Sacred and Profane Love Machine*」を読む——アイリス・マードックの描く“メロドラマ”と題した発表で始まった。司会は野口ゆり子氏。

中窪氏はこの作品を Peter Brooks などの諸説を援用しつつ、「メロドラマ」的に読む可能性を具体的な登場人物の分析を通じて示した。発表は新たな読みの枠を提示することで同作品の持つ豊かさを改めて示すこととなった。

次に多和恵子氏が「日本哲学への近接—アイリス・マードックと西田幾多郎における善の観想と小説『鐘』におけるドーラ・グリーンフィールドの人物造形と日本学会との親交からの精神的影響」と題して、西田哲学の善とマードックの作品における善との比較発表を行った。司会是小林信行氏が務めた。発表後、ニューズレター第16号に掲載された学会の初代会長である室谷氏の投稿記事に使われていた写真それぞれについて多和氏からコメントがあり、フロアからの意見を求めたあと、日本とマードックとの関係を研究していくことの重要性が訴えられた。最後に Fiona Tomkinson 氏に捧げる詩が披露された。

次にトルコから参加した Fiona Tomkinson 氏が「*Bruno's Dream: Murdoch's Intertextual Web*」と題して Wendy Jones Nakanishi 氏の司会により発表を行った。トルコの政情不安定により、最初は Tomkinson 氏の参加が危ぶまれたが、結局、出国が可能となり無事の来日・発表となった。氏はこの作品のテキストが Arnold Bennett の

Clayhanger やイタリアの哲学者 Giordano Bruno のテキストとも深い近縁性を持つことを示し、さらに William Blake の詩 “The Fly” や他の小説家の作品にも触れながら、氏ならではの豊かで独創的な読みを披露した。

4番目の発表者は小野順子氏で、司会は井上澄子氏が務めた。小野氏は一昨年イギリスに滞在して Anne Rowe 氏の講義を受けた経験話をした後、「『黒衣の王子』に見る愛の力」と題して研究発表を行った。小野氏はこの作品を「自我の死を描きながら愛に殉じる物語」とする立場から、The National Portrait Gallery にあるマードックの肖像画の背景として使われたティツァーノの絵「マルシュアスの死」のマルシュアスと物語の主人公ブラッドリーを重ね合わせながら「愛の力」を論じた。思い入れのこもった発表に深い感銘を受けたフロアからは活発な意見が出された。

最後の発表は、Paul Hullah 氏が “Kestrels and Storks: A Defence of Murdoch’s ‘Self-Deluding’ Faith in the Sovereignty of Good” と題して、筆者の司会により発表を行った。ハラ氏はイギリスの批評家 John Carey 氏が、その著書 *What Good Are The Arts?* において ‘The Sovereignty of Good’ からの一節を取り上げてマードックを酷評していることを紹介し、ケアリー氏の解釈・評価がまったくの見当違いであることをマードックの詩の援用もしながら指摘し

た。ハラ氏の見解に、司会である筆者も賛同した。同著の中でのケアリー氏のマードックに対する評言は言いがかり的なものでしかない。

研究発表のあと、浜野研三氏により、「歌を忘れたカナリヤに歌を思い出させるもの：マードックの道徳的实在論と文学」と題して講演が行われた。司会は当学会会長の Paul Hullah 氏が務めた。浜野氏からはあらかじめ、学会の開催される1週間前に講演のためのハンドアウトのファイルが事務局に送られ、参加者はそれに事前に目を通してから講演に臨むことができた。浜野氏は、具体的に、マードックの文章の一つひとつにもとづいて彼女の哲学の意義、現代的意味を解き明かし、私たちがその小説を読み理解するために、極めて有効な道筋を示してくれた。氏の魅惑的な語り口には時の経過を忘れさせるものがあり、じつにすばらしい講演であった。深く感謝したい。

学会終了後、「こんびらさん」近くの琴参閣に場所を移して懇親会が行われた。極上の料理に舌鼓を打ちながらの約2時間の談笑の後、来年の明治学院大学での再会を約して解散となった。

今回、会場を提供し、細やかな心遣いで学会を支えてくれた四国学院大学の中西ウエンディ氏には心から感謝の意を表する次第である。夫君丹精のミカンも極上だった。